編集前記

川本隆史

小特集「からだ・ことば・文化」への全般的なイントロダクションを書くことはやめて、最近読んだ桜井哲夫の『ことばを失った若者たち』（講談社現代新書、一九八五）を紹介してみたい。本書は、マンガやアニメのキャラクターに恋する若者たちやヒモを結べない子どもたち、罪悪感もなく「浮浪者狩り」をする中学生たちがともに「肉体への実感の喪失」に陥っており、脈絡もなくふわふわと漂っているだけの〈ことば〉の氾濫（人名を冠したスナック菓子、駅の伝言板の意味不明の落書き、単語だけによる会話）がそれと軌を一にしていることの指摘から始められている。彼はこうした〈ことば〉の混乱のルーツを求めて、六〇年代の若者文化の軌跡を加藤秀俊の『中間文化』論を手がかりに、深夜放送、エレキブーム、旅、フーテン、青春マンガ、とたどるのだが、その頂点にくるのが「全共闘運動」である。〈からだ〉と〈ことば〉のずれを問題にした六〇年代の芸術運動をうけたこの学生叛乱においては、〈ことば〉こそが最大の問題になった。甘えを拒否しイエスとノー（つまり各人の人間的立場）をはっきりさせようとした運動の中で、あいまいな日本語（＝母性的言語）への反撥は日本語という「かたち」を徹底して破壊することに向けられ、果ては肉体による激突へと向かった。

ところが学生叛乱の敗北＝抑圧およびその後の日本社会を支配した「対立の排除」という心理的機制とが、〈ことば〉への限りない不信を生み出す基盤となり、「しょせん世の中は動かない。その中で楽しくやるしかない」といった圧倒的な現実肯定と無力感が若者をおおった。こうして〈モノ＝商品〉の支配、からだの〈モノ〉化、性のモード化、過剰コード化が進展する一方で、〈ことば〉を失った若者たちが出現しており、それは世代対立の枠組などでは語れない大きな問題を提示している、と主張される。ではどうすればいいのか、失われた〈ことば〉は発見されるのか？一般的な解答を拒否する彼は、〈聞く〉ちからの回復と逃げ場（アジール）――徹底的な信頼関係としての「甘え」の空間――の確保という二つの方向性を示唆するに留めている。

桜井の主張を全面的に肯定するものでもないし、本号を編集する出発点に彼の問題提起をおいていたわけではない。むしろ以下の論文を読めば明らかなように「からだ・ことば・文化」は、文化学の根本問題の一つとして立てられている。しかし文化学の展開ということの他に、もう一つ次のような編集意図があることを述べておくべきだろう。すなわち「気」「言霊」「語り」さらには「負のことば文化」「自由精神」といった本号の〈ことば〉に耳を傾けることを通じて、会員諸姉が自分たちの生活＝文化を反省的にとらえかえすきっかけを与えること、商品（モノ）文化によるおしきせの表現をいったんカッコに入れ（タンマし）ながら〈ことば〉への回路を自分なりにゆっくりと見つけ出すための「逃げ場」を本誌が提供すること、これである。